

観音物語 (1) ふたたび法座に登る

世尊妙相具 我今重問彼 仏子何因縁 名爲観世音

世尊は妙相を具りたまふ 我れ今重ねて彼に問いたてまつる 仏子何んの因縁をもつてか 名づけて観世音と爲す

世尊釈迦牟尼仏は、八万四千の大衆に観世音菩薩の功德を説いた。

聞き終えた大衆は、観音さまの威神力のすごさに誰もが驚嘆した。感動がいつまでも続く。法悦が潮騒のように胸に押し寄せる。とめどもなく熱い涙があふれる。観世音菩薩の名前を絶賛する声が随所から唱え始められた。その声は、会場全体に波動し、大合唱になった。

「ナム カンゼオンボーサ」

「ナム カンゼオンボーサ」

「ナム カンゼオンボーサ」

天を仰いで慟哭している信者がいる。王も妃も大臣も、称賛する自らの声に打ち震えながら、観音菩薩の名号を唱えている。うつむいて嗚咽している婦人もいる。子どもたちも泣いている。合掌して瞑目を続けている弟子もいる。大衆は心から観世音菩薩の威神力に大満足した。そして、さらにその功力をもっと深く知りたいと願った。

再度の説法懇願の大合唱が沸き起こった。会場が大きく唸っている。いつまでも拍手が鳴りやまない。説法要請の歓声と拍手が怒号のように波うっている。

群衆八万四千の歓声の渦のなかから、無尽意菩薩が立ちあがった。そして、手を高く挙げて、会場の歓声と拍手を止めた。やおら席を去りかけた釈迦牟尼仏も、足を止めた。

無尽意菩薩は立ったまま合掌をしている。

「世尊、今しばらくここにお留まりください。そして、観音さまの因縁をもう一度お聞かせください」

菩薩は慇懃に二度目の説法を懇願した。

釈迦牟尼仏は無尽意菩薩の方へ顔を向けた。

群衆の沈黙のなかで二人が向かいあって立っている。

「弟子を代表して申し上げます。観世音菩薩は私のよりどころであることを、今はっきりと気づきました。この気づきは私ひとりではありません。ここにいる全員が目覚めました。お疲れでしょうが、どうかもう一度、観音さまの因縁についてお尋ね申し上げます。いかなる意味があつて『観世音』というお名前がついているのですか、今一度、私たちに観音さまの功德をお聞かせください」

釈迦牟尼仏は静かに元の座坪へ着いた。

世尊は、おだやかな眼差しで軽く首を縦に振った。一文字に結んだ口がほころび、白い歯が光った。無尽意菩薩は深々と頭を下げ、合掌をしながら座った。

大衆のなかには、「なぜ同じ話を繰り返すのか」と腑に落ちない弟子もいたであろう。あるいは、「お疲れの世尊に同じ説法を続けて求めることは失礼ではないか」と、心配する菩薩もいたであろう。しかし、席を立てて退出する者はひとりもない。聴衆全員は坐ったまま固唾を呑んで世尊の第一声を待っている。

信仰は自分自身の問題である。それゆえに、無尽意菩薩は観世音菩薩の行ないが気になって気になって仕方がなくなったので、再度の説法を要請したのである。もう一度しっかりと聞きたい。聞くことによって、「観世音は自分自身のことである」という信念をしっかりと胸に刻んでおきたいのである。

世尊は観世音菩薩の威神力について、青少年にも理解できるように、やさしく具体的に語り伝えたはずである。しかし、それごとで聞いていた子どももあり、まだ聴衆全員が理解したとは思えない節も感じられた。あまりにも偉大な観音力が信じられないのである。観世音菩薩の清らかな大願を周知させるためには、世尊は妙なる技をもって、さらに大衆の疑念をつかむ必要があつた。

ふたたび法座に登った。

世尊と無尽意菩薩は、眼をあわせて微笑し、二度目の説法が始まった。